

## 九州の石の文化



田中 清章  
TANAKA Sumiaki | 東京家政学院大学

「人間が減びると云うことは“文化”が減びると云うことだ」。NHKドラマ『坂の上の雲』(司馬遼太郎原作)のなかで正岡子規が云った言葉である。この“文化”の意、広辞苑では「(culture)人間が学習によって社会から修得した生活の仕方の総称。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容を含む」とあり、大辞泉では「人間の生活様式の全体。人類がみずからの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体。それぞれの民族・地域・社会に固有の文化があり、学習によって伝習されるとともに、相互の交流によって発展してきた」とある。

「九州の石の文化」とは「九州という地域に深く根付き、石を材料として人々が自らの手で築き上げた有形(石造構築物など)・無形(技術・手法など)の成果の総体」とするが、ここでは九州の石造構築物のうち、城壁や石造アーチ橋・用水路等の土木関連技術分野の石工技術の伝播ルートを主に扱う。



図1 肥前名護屋城跡古絵図



写真1 沖縄県那覇市の首里城城壁



写真2 沖縄の亀甲墓

### 石工集団の居住地と技術

九州には、特殊な技術を持った石工集団が居住していた地域あるいは村があり、その石工集団のルーツ(系譜)及び石工技術の伝播経路が、九州独特の石の文化を醸成した経緯を明らかにしたい。

土と石及び木は人類史上で最も古い土木・建築材料であるが、ヨーロッパなどと違い日本では地震等の影響からか、石は建造物にはあまり使用されなかった。しかし九州地域には、他の地域では見られない数々の石造物がある。たとえば佐賀の肥前鳥居、福岡の石人・石馬、熊本城をはじめとする城壁や堀の石垣、九州全域に分布する石造アーチ橋、用水路、堤防、石樋、護岸石塁、旧琉球地域のグスク(城)、亀甲墓等をあげることができる。

石工の技術は石を加工(細工)するだけではない。積み上げる(組み上げる)技術、組み合わせる技術、道具などを製作する鍛冶の技術、陸運・水運における石を運搬する技術など種々のものが必要で、それらが有機的に機能して、はじめて総合的な技術として活かされてくる。これらの特殊技術は、九州各地に集団で居住した石工達によって守られ伝承されてきた。

九州の石の文化を語る上で、最も影響を与えたのは琉球石工、穴太石工及び長崎石工である。その素地として九州地域は、朝鮮半島の任那日本府(軍事拠点)時代や三国時代(新羅、百済、高句麗)の小国家との交流が盛んであった。朝鮮半島では花崗岩を主材とする石造文化が知られている。一方、日本では木材が豊富に産出されたことや地震等の要因から、石室・石棺・石人・石馬などの宗教的シンボルとしての石造造形物や古墳・防塁などの土木分野に限定された。特に、日本独特とされる前方後円墳などは朝鮮半島の全羅南道や全羅北道に見ることができる。硬い石を加工(細工)し、運搬し、積み上げる特殊な技術・技能は、一朝一夕にできるものではなく、朝鮮半島や中国大陸からの渡来人による技術がなければ、成しえなかったと推測する。

これらのことを実証する興味深い資料がある。1181(養和元)～1203(建仁3)年の東大寺の再建記録である『東大寺造立供養記』に、「大蔵氏は宋の人で鎌倉時代の奈良東大寺再建などを通じて、日本に石の加工技術を伝えた集団であり、帰化した石工・伊行末の子孫は、伊派といわれる石工集団や、関東へ渡った伊派の分派大蔵派と云われる石工集団を形成した」とある。また、平安時代初期の815(弘仁6)年に嵯峨天皇の命により編纂された古代氏族名鑑『新撰姓氏録』によっても明らかである。この中で注目しているのは「諸蕃」に渡来人系の氏族として秦や大蔵など326氏が挙げられ、特に、大蔵氏の主な根拠地が九州及び山城国(現在の京都府南部)であることや、その支流・分家には九州でよく聞く姓である原田、秋月、江上、小金丸、波多江、三原、田尻、高橋などが挙げられていることである。このように、日本及び九州における基礎的な石工技術は、中国や朝鮮半島からの渡来人によって伝えられたと云えよう。

### 琉球の石工

琉球の石工は、沖縄県全域と南西諸島を含む地域で活動した石工集団を指し、グスク時代(12～14世紀)～琉球王国時代(1429～1879年)に中国大陸や南蛮との交易・交流で高度な石造技術がもたらされ、それを駆使してグスク、石橋、石畳、ヤンガーと呼ばれる石井戸、亀甲墓、石門などを築造した。



写真3 熊本城石垣。1607(慶長12)年、加藤清正により築城



写真4 唐津城。1602(慶長7)年、寺沢広高により築城

何故、この地域に特異な石造物が多く現存するのか。それは比較的地震は少なく、毎年多くの台風が襲来し、長尺建材が入手し難い等から、沖縄の土地の30%を占める琉球石灰岩を使った土木構築物や建造物が発達したからである。これらは、長虹堤(石造アーチ橋を含む)、石敢當(山東省泰安市泰山の石で造られた魔除石で、雲南省・シーサンパンナ(西双版纳)やタイ族自治州・陝西省等の中国各地にも点在)、ヒンプン(中国福建省語の屏風)等からも確認できる。

また、その伝播ルートは中国本土や南蛮からきた渡来人であったと考えられる。特に、当時の日本初の石造アーチ橋と云われる長崎の眼鏡橋(1634(寛永11)年竣工)に、遡ること180年以上前の1451年(第一尚氏王統時代)に長虹堤、崇元寺橋、天女橋(1502(文亀2)年竣工)等に石造アーチ技術が活かされている。その後も1527(大永7)年以前に築造された石造三連アーチの旧崇元寺第一門及び石牆など、幕末まで営々と本地域に石造アーチ架橋を行った。長崎とともに石造アーチ架橋技術の一方の主要ルートであった。

しかし1609(慶長14)年、琉球に島津藩が侵攻し幕末まで間接支配を行うが、1840(天保11)年からの薩摩藩の西田橋等の甲突川五大石橋の架橋に際して、琉球の石工ではなく岩永三五郎等の肥後の石工の技術に頼ったのは何故かという疑問がわいてくる。薩摩藩がこのような状況であることからしても、他藩においては言わずもがなである。したがって、琉球ルートは琉球独自の架橋技術であり、旧藩へ伝播しなかったと考えられる。

### 熊本藩・鍋島藩・唐津藩の石工

熊本藩・鍋島藩・唐津藩の石工は、安土桃山時代から江戸時代に各藩に召し抱えられた穴太の流れを組んだ石工集団であり、主に城壁や堀の石垣普請や用水路(護岸石塁・石樋など)の藩普請工事に従事

する系統である。文禄・慶長の役(1592~1598年)の後、各藩は石工衆を、熊本藩が上島(上益城郡上島)、唐津藩が値賀河内(旧石工町／東松浦郡玄海町)、鍋島藩が砥川(小城市牛津町・小城町)・塩田(嬉野市)などに移住させた。仕官した石工は幕府の「穴太頭」、諸藩の「穴太役・石垣方」等として仕え、世襲制で棟梁一族のみが、各藩に召し抱えられた。穴太役として取り立てられなかった多くの石工達は、各藩の石垣普請に駆り出され、名字帯刀も許されず、決して身分は高くなかったが、「石工組」もしくは「組」という民間相互扶助組織として存続した。

このような石工集落は九州の全域に数多く確認できる。穴太棟梁の「粟田家(現在の粟田建設)・後藤家」、熊本藩(加藤・細川)の普請作事所支配穴太／穴太役「戸波家」、黒田藩の普請奉行支配穴太方「穴太家・戸波家・小林家」、鍋島藩の石垣方「武富家・平川家」、唐津藩の「徳永家」、久留米藩の御材木石奉行支配穴太頭「小林家・戸波家」、柳河藩の十時太左右衛門組「戸波家」、小倉藩の「穴太家」等が知られている。しかし、その俸禄は高くても200石であり、決して高位の職ではなかった。

1602(慶長7)年の唐津城築城時の石垣普請には、鍋島藩石垣方武富家と姻戚関係にある値賀河内の徳永家差配の職人達が多く駆り出され、黒田の舞鶴城、唐津城などの築城にあたっては、島原の乱(1637~1638(寛永14~15)年)の二の舞を踏まない様に名護屋城跡の遺材(石垣四隅の要石)を取り壊し移築した。また、砥川の武富家は藩主建立の肥前鳥居(佐賀県佐賀市)、音成黒木川石樋(佐賀県鹿島市)などの作事に従事している。

これらの藩お抱えの穴太役や石工組は、石造アーチ架橋技術を持っていないのが特徴である。唯一例外なのは、熊本藩の穴太方戸波家支配の上島村

石工・仁平が長崎の架橋技術を習得し、1774(安永3)年に洞口橋(アーチ橋)を架橋したが、藩の普請ではなかった。

### 長崎の石工

長崎の石工は、江戸時代前期に活動した琉球石工と共に日本におけるアーチ架橋技術を伝承した石工集団である。創始は中国江蘇省揚州興福禅寺出身の黙子如定(長崎興福寺二代目住職)が、長崎の中島川に1634年に架橋した長崎眼鏡橋で、その後20基余りの石橋を架橋した。これらの橋は、当時の末次平蔵一族(長崎代官)や渡来僧及び商人等の町の実力者と共同で造られた。このとき従事した石工衆が、大牟田市の早鐘眼鏡橋(1674(延宝2)年竣工)や平戸市の幸橋(1702(元禄15)年竣工)などにも従事したと推察するが、史実では福岡県朝倉市の秋月眼鏡橋に長崎石工の存在が確認できる。当時の秋月藩(黒田支藩)は長崎警備黒田藩代理を務め、長崎眼鏡橋を見た8代藩主黒田長舒の希望で、長崎から呼び寄せた石工衆により1805(文化2)年に工事を始めたが、完成直前に崩壊、その後再開し1810(文化7)年に竣工した。

このように長崎の石工は、日本における石造アーチ架橋技術の創始集団である。しかし、その架橋技術の伝播ルーツについては、中国渡来僧が造ったことなどから中国大陸からと考えられているが、その後架橋された幸橋や秋月眼鏡橋等にはオランダ橋の別称が使われたことも興味深い。なお、石工衆の居住地については長崎のみが使われ、具体的な地名は不明である。

### 肥後種山・野津の石工

肥後種山・野津(熊本県八代市東陽町)の石工

は、江戸時代後期から明治中期にかけての約70年間に、主に石造アーチ架橋工事に従事した石工集団である。肥後種山・野津は凝灰岩を多く産出する地域であり、他の地域とは異なり、石細工と云うより石の切り出し、運搬に従事したことが特徴である。

始祖は藤原林七(1765~1837年)で、長崎奉行所に勤務したが、中島川の眼鏡橋の架橋技術に関心を持ち、出島のオランダ人からアーチ橋の建造技術である円周率の計算方法を学んだが、接触したことが露見するのを恐れ1787(天明7)年に種山に移住した。そして地域の石工と協同して石造アーチ架橋技術を完成し、種山石工組を結成した。この石工組の特徴は旧藩領等の地域を限定せず、旅石工として九州各地に出かけて架橋していることである。1800年代中頃には熊本の通潤橋や霊台橋、鹿児島市の甲突川五石橋(玉江橋・新上橋・西田橋・高麗橋・武之橋)などを手がけた。肥後の石工からは、岩永三五郎(1793~1851年)や橋本勘五郎(1822~1897年)等を輩出した。

岩永三五郎は1820(文政3)年、八代市の干拓工事に従事し、石工共総引き回し役となり苗字帯刀を許され、1840(天保11)年に薩摩藩からの依頼で甲突川五石橋を川の護岸工事と併せて架けた。明治政府に招かれた橋本勘五郎の架橋技術は、神田川の万世橋、江戸城外堀の旧二重橋、神田橋、浅草橋の架橋にいかされた。しかし勘五郎が明治中期に亡くなったからは種山・野津石工集団は忽然と姿を消した。これは明治中期以後、鋼とコンクリートを使った新しい構造の橋の出現によって、石造アーチ橋の需要が無くなったことに起因するのではないだろうか。

### 備前阿津村石工

備前阿津村石工は、江戸後期に全国各地で活動した小坂勘五郎をはじめとする備前阿津村(岡山市阿津)出身の石工集団である。特にこの石工達は、全国を股に掛けた「出職」集団であった。1997年11月24日の山陽新聞には「勘五郎たちは『備前の石工』として全国各地へ出向いて仕事をした『出職』集団であった。彼らは児島半島北岸に位置する阿津村などの農家の次男・三男(土地を分けてもらえない)で、児島湾の干拓などに伴う石積堤防や樋門などの工事に賃



写真7 石橋記念公園に移設された鹿児島甲突川五大石橋西田橋。1846(弘化3)年、石工岩永三五郎等により架橋



写真8 馬門橋。1827(文政10)年、備前阿津村の小坂勘五郎により架橋

稼ぎのため参加することで、技術を習得して石工として自立した」とある。

1827(文政10)年の熊本県砥用町の馬門橋など、計5基の石造アーチ架橋を行っているが、架橋技術をどの地域で習得したかは不明である。

### 石工集団と技術の伝播

以上、九州の石の文化について、石工組織、居住地域、石造アーチ架橋技術の概要を明らかにした。その要点について、次のようにまとめることができる。

第一に、石工集団は細工石工と山取石工に分かれ集団で居住していた。第二に、石工の組織は藩の普請作業を行う穴太役と、庄屋など村や町の有力者が普請工事を請け負う組織があり、その技術は秘伝であった。第三に、武士階級の穴太役は低い身分で召し抱えられ、主として藩領内の石垣普請に従事し、石造アーチ架橋技術はなかった。また、九州各藩の穴太役は互いに姻戚関係にある。第四に、石工集落は例外もあるが海・河川等の水運に恵まれた地域・地区に限定され、決して石材産出地が絶対条件ではなかった。第五に、石造アーチ架橋技術は大きく中国・南蛮からの琉球ルート、長崎から肥後仁平グループと肥後種山グループへと伝わる長崎ルートの2ルートがあった。しかし、長崎ルートが全国各地に普及したのに対して、琉球ルートは旧琉球地域に限定されていた。

このように、九州には他の地域にはない特異な形態を持つ数々の石造物があり、それらを制作・普請した石工集団と石造アーチ架橋技術の伝播ルートが九州の石の文化を醸成したと云えるのではないだろうか。

<図・写真提供>  
 図1、写真4 出典:Wikipedia 写真1、8 塚本敏行  
 写真2 佐藤尚 写真3 遠藤徹也 写真5 中島知彦  
 写真6 松田明浩 写真7 惣慶裕幸



写真5 長崎眼鏡橋。1634(寛永11)年、黙子如定らにより架橋



写真6 通潤橋(水路橋)。1854(嘉永7)年、種山石工により架橋